様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１２８２２

研究課題名（和文）行為と形象の間－近代の書における「臨書」の諸相をめぐる考察

研究課題名（英文）Relations between Performances and Images: The Various Aspects of 'Rinsho' in the Modern Calligraphy

研究代表者
萱　のり子（KAYA, Noriko）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：７０３１４４４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：近代における東西の交流は、東アジアにおける伝統と近代の交差として顕れている。書は美術ではなく従来の書のままでもない、個性表現を求めてきた。本研究の成果は、それを概念的にのみ扱うのではなく、経験的に多様な角度から照らして分析・考察を試みたことである。（１）和歌と密接な関係にある仮名に焦点をあて、その美的様相をモダニズムの観点と交差させて考察した。（２）学校教員による「臨書」の授業実践を検証し諸相を報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代以降、学芸領域の実践および研究教育の進展は、諸領域が細分化される方向へ向かってきた。その功罪は、本研究の対象である「臨書」という行為に象徴的に現れている。うつす（写す、移す、映すなど多義）行為に関連する意識のあり方は、書というジャンルのみならず、学ぶこと、伝える（伝わる）ことなど文化全般に関わる課題と通底している。その構造的側面に着眼しえたことは、近代以降の諸現象の考察に関する意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：The interactions between the East and the West in the modern era have become prominent as the intersection of tradition and the modern age in East Asia. Calligraphy in the modern was not considered fine art and did not remain conventional,the expressions with emphasis on indivisually were pursued.It is result in this study not only to handle it conceptually, but also empirically illuminate it from various angles and attempt to analyze and examine the complex phenomena. (1)I focus on kana characters which are closely related to waka poems and attempt to consider aesthetic aspects of kana by intersecting them with the idea of modernism. (２) I made reports of the field verifications about 'Rinsho' by the school teachers in the various kinds of school education.

研究分野：芸術学

キーワード：臨書　行為　形象　近代　教育　和歌

**１．研究開始当初の背景**

明治以降の近代化にともない、日本においてはそれ以前の文化や教育のあり方が大きく変化した。近年、地球規模で環境問題が浮上し、近代化の功罪が多方面において見直しを迫られるようになってきた。

研究代表者はこれまでに、東アジアの芸術文化の特色およびその教育現場での取り上げられ方に視点をおいた研究を行ってきた（基盤研究（B)「東アジアにおける鑑賞教育の現状調査ならびに比較研究」平成１６年度～平成１８年度、研究代表者・萱のり子)。主たる対象は、中国・台湾・韓国・日本である。鑑賞教育の理念に関する資料は、対象国おのおのが「伝統」を重視し、自らの文化的アイデンティティーの認識に意をはらっていることを示す。しかし、おのおのの国はまた、日本と同様に近代国家としての歩みももつため、「伝統」の内実は複雑である。

書画領域に焦点をあてると、近代以降、それぞれのジャンルが分化し、おのおのに固有の歴史をもつようになっている。書というジャンルの内部について見ると、鑑賞の視点が造形面に特化するように進み、活動面においては鑑賞と表現は分断されてきている（萌芽研究「感性的認識としての書における「作品」概念の成立」平成１４年度～平成１６年度、研究代表者・萱のり子)。書の鑑賞において文学性は排除され、筆線による形の追求が目指されるようになる。この傾向は、絵画における純粋可視性を求める表現傾向と合致している。

上記のような研究をすすめる中で研究代表者は、美学・芸術諸科学と感性的教育実践の両方に関わる問題として以下の２点が深刻であると考えるようになった。１つは芸術研究と芸術教育との分離、もう１つは芸術経験の一面化・局面化である。

「臨書」の現場では、身体を介した個別の営為が、社会的な規範を備えた形象を生み出していく。そのプロセスにおいて認識される価値のありかたを明らかにすることにより、有機性や全体性という視点のもつ文化的意義を具体的に検証できるのではないか。この着眼点にたつ研究は国内外において、まだない。

**２．研究の目的**

本研究は、東アジアに特有の文化現象である「書」を対象とし、そこで不断に行われてきた「臨書」（見て書く・うつす）という営為に着目した考察を行うことを目的とする。

「臨書」という営為は、原本のテクストに規定されながら、連続する線の起伏を書き手が分節化して新たな関係付けを行うという点で、１つの解釈行為として捉えられる。筆跡Ａから筆跡Ｂへと何がうつされたのか。明治時代以降の「臨書」を観察し、その目的と方法との関係を素描することにより、近代以降の書の特質を明らかにし、これとの関係で同時代の文学・絵画における作品考察への新しい着眼点と方法を提示していく。

## ３．研究の方法

**当初の研究方法の見通し**

１　近代以降の「臨書」の具体相を捉えるために、臨書に関わる文献資料を下記Ａ・Ｂの2点により収集する。

Ａ　　行為としての「臨書」、形象としての「臨書」を観察するための資料収集

Ｂ　　形象比較のための視点・記述のための術語の検討に関わる資料収集

２　文献による記述内容が、実際の筆跡とどのように符号あるいは関係するのかを分析するため、下記Ｃ～Ｅの３点による研究を行う。

Ｃ　　臨書筆跡の熟覧①②

Ｄ　　調査資料の整理・リスト作成

Ｅ　　形象論の読解と書人の「臨書」に関わる言説の整理

**研究遂行過程における絞り込み**

「臨書」の具体相の把握、文献記述と筆跡（現象）との関係の把握、をテーマ化するには、作家の臨書態度の観察、筆跡に現れる書写的要素と書表現の要素との関連を探る必要がある。書活動は、歴史的に「臨書」行為の存続によって受け継がれてきているともいえるため、解釈行為の実相を明らかにする方法を探ること自体を一つの目標として進めた。

## ４．研究成果

**平成２７年度**

近代以降の芸術観の影響を受けながら、従来の書の特性を生かしつつ表現活動を試みた作家の臨書観を手がかりとし、「臨書」における主体の関与に着目して、臨書の構造に関する考察を行った。

美術館・博物館での展示作品を実見する場合と収録図版による作品を扱う場合とでは、「形」から発せられる意味内容が異なってくるため、形と行為との関係を可視化しうる臨書対象を絞り込み、１つのモデルを描く必要が生じた。

**平成２８年度**

書の形象のうちに筆脈や用筆等の行為的側面が成立するための環境を考察することに主眼を置いた。東アジアにおける書文化は、近代以前までは「書く」という経験を共有する環境において形象経験が成立してきたが、近代以降は必ずしもそうではない。この差異は、「臨書」という行為にも影響が及び、臨書概念も変容させてきていることが明らかとなった。

この現象は、現代の教育の現場にも顕われてきている。そこで、学校現場における書の形象経験の特徴を実践的にとらえることに着手した。文字を学びつつ造形への視点を養う

という行為の実践は、同時に臨書者の個の実現にもつながっている。学校現場での「臨書」に対する視点を多様化することにより、歴史的形象としての文字と臨書者の行為としての文字とがどのように関係づくかを考察することができた。この成果は報告書『臨書を基点とした実践的授業研究―文化理解と個の実現―』としてまとめた。

平成２９年度

「臨書」概念が形成される要因とそのプロセスに着目し、臨書行為の観察を行った。前年度の実践研究によって、文字形象の捉え方の原形は、学校教育における影響が強いことをふまえていたため、当年度は引き続き、小・中・高・大の各校種にわたって「臨書」をテーマとした授業研究を行った。この実践研究を柱として、原本理解や「書く」行為の特質等について検討した。この成果は報告書『臨書を基点とした実践的授業研究Ⅱ―批評力を高めるための２つの検討』としてまとめた。

学校教育における実践研究を柱としたことには、文字との関わり方や文字形象の見方の基礎が学校で築かれる（学校という制度は、近代における産物であり現代に引き継がれてきた）という点と、学ぶことの原点として「まねぶ」「まねる」行為が存しているという点に拠る。作品制作や鑑賞の場における狭義の「臨書」を扱うのではなく、文字を習得することや、文字を書くことのプロセスにおいて「まねび」の要素がどのように関与しているかを見ることによって、学校教育現場での指導者の目線を検討することができた。

平成３０年度（最終年度延長）

近代以前に成立した筆跡がどのように近代以降へと伝えられるのか、「臨書」の諸相を観察するための題材として「秋萩帖」を選定し、行為と形象に関わる連続と非連続の要因を探った。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２件）
①萱　のり子、手・様・体―筆跡の語られ方をめぐって、美学研究、第 11 号、査読無、2017、86－100.
②萱　のり子、書ニ臨ム－行為としての臨書、美術フォーラム 21、第 31 号、査読有、2015、69－74.

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　１件）
①萱　のり子他、秋萩帖の総合的研究（秋萩帖における美的感受）、勉誠出版、2018、395（161－206）.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
報告書（計　２件）
①萱　のり子他、「臨書」を基点とした実践的授業研究Ⅱ－批評力を高めるための２つの検討、2017 年 12 月、100 頁.
②萱　のり子他、「臨書」を基点とした実践的授業研究―文化理解と個の実現、2017 年 2 月、81 頁.

ホームページ等　　該当なし

## ６．研究組織

(1)研究分担者　　なし
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：小林 真由香(KOBAYASHI, Mayuka)、北田　創(KITADA, Hazime)、藤井　美和子(FUJII, Miwako)、門口　絵美 (MONGUCHI, Emi)、富川　展行(TOMIKAWA, Nobuyuki)、太田　菜津子(OTA, Natsuko)、櫻井　佑美(SAKURAI, Yumi)、笹見　ゆかり(SASAMI, Yukari)、五十井　玲衣(IKAI, Rei)、中村　清美(NAKAMURA, Kiyomi)、古田　瞳(FURUTA, Hitomi)、坂本　枝弥(SAKAMOTO, Emi)、藤田　彩花(FUJITA, Ayaka)、岡村　美里(OKAMURA, Misato)、内山　裕美(UCHIYAMA, Yumi)、浦　有希(URA, Yuki)、茂木　絢水(MOGI, Ayami)、石原　敬子(ISHIHARA, Keiko)、押野　加奈(OSHINO, Kana)、田中　有紗(TANAKA, Arisa)、白石　紗雪(SHIRAISHI, Sayuki)、林　美月(HAYASHI, Mizuki)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等に

ついては、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。